

優秀賞

千波湖が語る過去と未来

水戸市立笠原中学校

三年 大森 花 音

千波湖は、水戸市の中央に位置する湖で、日本三名園の一つである偕楽園の借景として、水戸市を代表するシンボルになっている。周辺には四季折々の植物が見られ、白鳥や鴨などの水鳥、魚など多種多様な生物の生息地となっている。一周3kmの湖周では、多くの市民がジョギングや散歩を楽しんでいる。さらに、祭りなどのイベントも催され、市民にとつての憩いの場となっている。私自身も幼い頃から、家族とともに千波湖を訪れ、たくさんの自然と触れ合ってきた。

奈良時代に編さんされた常陸国風土記には、茨城県の風土に関する記録が数多く残されているが、その中に、「ダイダラボウ伝説」なるものがある。千

波湖は、ダイダラボウという大男の足跡だとして語り継がれている。

私は幼い頃、この話を「水戸郷土かるた」を通して知ったが、長きに渡って受け継がれ、人々の身近にあった千波湖の歴史はどのように紡がれてきたのかということが気になり、調べることにした。

千波湖は約五千年前頃、那珂川の氾濫が起きたことがきっかけで、形成されたそうだ。

江戸時代になると、水戸藩の城下町造りの一環として、千波湖は、水戸城の外堀となるように改修された。人々の力で整備された千波湖は、水戸藩にとって水戸城を守る要となったのだ。「千波湖」という名が付けられたのも、このころからだということ。

その後、現在も残っている備前堀が造られると、千波湖の水は周辺の水田へ供給されるようになった。一八四二年に徳川斉昭によって偕楽園が創設されると、千波湖は偕楽園の借景として欠かせないものになっていった。

大正時代後期になると、昭和時代後期にかけて、改修事業が進められ、東部が埋め立てられると、現

在の千波湖の姿になった。

現在、千波湖は環境省によって「生物多様性の観点から重要度の高い湿地」の一つに定められている。

このように古くから人々とともに歴史を歩み、生活を支えてきた千波湖だが、近頃ある問題が発生しているのを知っているだろうか。

夏場に訪れると、水面に浮かんでいるのは緑色の汚れ——アオコの発生による問題だ。水戸市が以前行った水生生物生息実態調査での水質調査では、四階級中下から二番目の、「汚れた水」だと測定されている。

アオコの発生は、河川の流入がないことから水が滞留していることに加え、生活排水からの栄養塩の流入によってもたらされている。

水戸市では、こうした課題への対策として、浚渫による底泥の除去、那珂川からの水の誘引、湖沼内の水の流動促進装地や噴水の設置など、数多くの取り組みが行われ、汚れの値を表すCOD値が減少したという効果も見られている。それでも、千波湖の浄化は未だ十分ではないのが現状だ。

こうした状態の中で、千波湖の美しい水資源を守っていくためには、私たち市民の工夫、すなわち、生活排水を減らす

ように努めることが必要なのではないだろうか。

料理や洗濯など、日常の中で私たちが生活排水を排出している場面は度々ある。生活排水を減らすことは、アオコの発生の減少をはじめとして、二酸化炭素の排出の抑制や、生物の生息環境の保全など、環境にとつてのメリットを数多く生み出す。例えば、食べ残しを減らす、洗剤の使い過ぎを防ぐ……そんな手軽なことでも、環境への影響を変えられるかもしれない。自らの環境に対する意識、そして限りある水資源に対しての自覚を持ち、行動を見直していきたい。

「水の都」、水戸。そんな故郷の美しい環境資源を、これからも大切に守り、誇っていきたい。